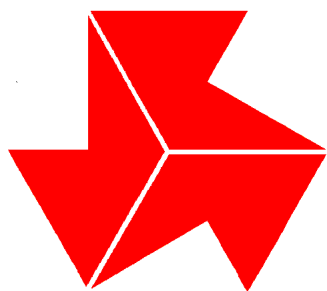


平成29年度
第11回石川県高等学校体育連盟研究大会

研究紀要



主催 石川県高等学校体育連盟

平成29年度 第11回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 目的 石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主催 石川県高等学校体育連盟
- 3 日時 平成29年11月28日（火） 14：00～16：00
- 4 会場 石川県青少年総合研修センター
金沢市常盤町212-1 TEL 076-252-0666
- 5 参加対象 石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 6 研究主題 「スポーツが結ぶ縁」
～高校生アスリート、世界へそして未来へ～
- 7 内容 研究発表
発表テーマ1 部活動の充実について
「部活動としてのボウリングの現状とその課題」
～全国高体連加盟を目指して～
発表者 ボウリング専門部
金沢伏見高等学校 今川 徹 教諭
- 発表テーマ2 健康と安全について
「ボート専門部の実態調査」
～生徒の健康と安全確保～
発表者 ボート専門部
小松明峰高等学校 高澤 隆介 教諭
- 発表テーマ3 競技力向上について
「競技力向上への取り組み」
～石川県バスケットボールフェスティバルに参加して～
発表者 バスケットボール専門部
金沢西高等学校 東 勝彦 教諭
- 8 日程

13:30	14:00~	14:10~	15:40~	15:55~
受付	開会式	研 質 究 疑 発 応 表 答	指 導 助 言	閉 会 式

部活動としてのボウリングの現状とその課題
～全国高体連加盟を目指して～

ボウリング専門部
金沢伏見高校 今川 徹

1 部活動としてのボウリングの歴史

(1) 石川県のボウリング部（同好会）の現状

石川県では全国に先がけて、昭和 61 年 4 月に金沢市立工業高校と金沢女子（現金沢伏見）高校に部が発足し、現在は金沢伏見高校、金沢市立工業高校、尾山台高校、星稜高校、金沢高校、内灘高校、小松工業高校が部（同好会）として活動している。各学校の部員数には増減はあるものの、毎年高校総体には約 120 名、新人大会には約 80 名の生徒が参加している。ほとんどの生徒が高校からボウリングを始める中、高校入学前からボウリングを続けている選手が全国大会で結果を残すことが多い。また、高校から始めて、3 年生 7 月の全日本高校全主権で個人優勝、12 月の全国高等学校対抗で団体優勝し、現在ナショナルチームに選出された選手もおり、男子 7 名、女子 1 名がプロテストに合格している。その一方で、ボウリング競技は、練習場所が公共の施設であり、施設の利用料がかかること、専門性のある指導者が教員の中にほとんどいないことなどから、なかなかレベルが向上しないのが現状である。

(2) 高体連加盟に向けた取り組み

石川県は平成元年に全国で初めて県の高体連に加盟した。以降、平成 10 年に神奈川県と三重県、平成 11 年に岡山県、平成 14 年に青森県、平成 19 年に沖縄県と京都府が加盟した。以後、この 1 府 6 県の専門部で全国高体連ボウリング専門部加盟連合会をつくり、全国の選手たちが他の競技の選手たちと同じように、学校の教育活動として取り組み、学校の代表として大会に参加できるように全国高体連に向けて活動をしてきた。全日本ボウリング協会（以降 JBC）と協力し、全国大会の監督会議の場で、高体連加盟を進める活動を行い、3 月には持ち回りで高等学校ボウリング選手権大会を開催し、開催地のブロックの選手たちに参加を呼び掛けてきた。

長い間、各都道府県の高体連への新規の加盟がなかったが、今年度大分県が 10 年ぶりに加盟を果たした。また、東京都は加盟の目前まで来ており、全国高体連加盟に向けてうれしい報告であった。

2 部活動としてのボウリングを取り巻く環境

部活動としてボウリングの現状を調査するために、高体連に加盟している府県に協力していただき、生徒及び顧問の先生にアンケート調査を行った。以後 1 府 4 県、27 校 391 名のアンケート結果のデータをもとに考察したものである。

(1) 練習場所の確保

ボウリングの練習は、当然であるがボウリング場に行く必要がある。学校の近くにボウリング場がある場合は良いが、遠方の施設に自転車や公共交通機関を利用して移動する学校も少なくない。それに加え、昭和 40 年代のボウリングブームのころに建てられたボウリング場は、耐震や防火の問題から施設の改修を求められ、費用を捻出できず閉鎖せざるを得なくなっている。石川県でも国体の会場であったジャンボボールが、来年の 3 月で閉鎖することが決まっている、国体会場では、千葉、富山、岡山、高知などがすでに閉鎖をしている。このような施設は、レーン数が多く、大会会場としても利点が多く、スポーツボウリングに対する理解も高かった。一方で比較的新しいボウリング場は、総合レジャー施設や商用施設に併設されている。レーン数も 30 レーン前後でコンコース（レーン後方のスペース）も大会をやるには少し手狭である。このような施設は当然

ではあるがレジャーでの集客を目的としている。しかし、ボウリングの競技人口を増やすため、底辺のジュニア世代を拓げるためにも、ボウリング場と協力し、工夫しながら普段の練習や大会をおこなって行く必要がある。

学校からボウリング場までの距離及び移動手段

学校からの距離	学校数	主な移動手段
～2km	6校	徒歩・自転車
2km～4km	11校	徒歩・自転車・電車・バス・顧問
4km～	9校	自転車・電車・バス・顧問

ほとんどの学校では、生徒が自分たちでボウリング場まで移動している。また、顧問がボウリング場まで送迎している学校も5校あった。中にはボウリング場まで10km以上離れている学校もあり、ボウリング場までの移動及び、練習後の帰宅の安全の確保も考慮しなければならない。特に、石川や青森では雪が降ると自転車が利用できなくなることから、冬場の練習に参加できない場合も考えられる。

(2) 費用の問題

高校生が個人でボウリングに行った場合、通常1ゲーム300円～400円程度の料金がかかる。また、都会では1G500円以上の料金が設定されているボウリング場もある。部活動で練習する場合はボウリング場の協力のもと、安価で練習させてもらっている。

①ゲーム代金

- ・1日500円を個人で支払う・定額の部費を集めその中から支払う。
- ・1ゲームの定額(80円、200円、210円)を個人で支払う・定額の部費を集めその中から支払う。

②個人負担(1か月にボウリングにかかる費用・用具代金も含む)

アベレージ	人数	練習量 ゲーム/週	～2個	3個	4個	5個～	円/月
～150	199	12.1	195(98%)	3(1%)	1(1%)	0(0%)	¥4,230
150～170	101	14.6	72(71%)	18(18%)	4(4%)	6(6%)	¥5,310
170～190	62	16.7	18(29%)	17(27%)	11(18%)	16(26%)	¥6,940
190～	25	24.8	3(12%)	3(12%)	2(8%)	17(68%)	¥9,400

1か月にかかる費用を、アベレージ別に整理してみた。表からもわかるように、アベレージが高い選手ほど練習ゲーム数が多く、1か月にかかる費用も多くなっていることがわかる。また、全国大会に出場するようなアベレージの高い選手ほどボールをたくさん持っていることもわかる。全国大会では1人あたり4個～6個のボールを持ちこんでいる選手が多い。ボールは新品で1個25,000円～30,000円なので、ボールの費用だけでもばかにならない。中古ボールを再利用すれば、1個5,000円程度で済むが、1か月5,000円程度の費用がかかり、レベルが上がるほど費用がかさむことになるので、保護者の理解と協力が不可欠である。

(3) 指導者の問題

調査した27校の顧問は1校1名～4名で合計54名であった。

- ・ 競技経験者 11名 (20.4%)
- ・ JBCに所属している 14名 (26.0%)
- ・ 日体協のスポーツ指導者等の資格を持っている。 8名 (14.9%)
- ・ 資格はないが指導はできる。 6名 (11.2%)
- ・ 外部の指導者の指導を受けている。 17校 (63.0%)
 - ボウリング場のプロ、スタッフ 13校 (49.0%)
 - ボウリング場以外のプロ、インストラクター 3校 (11.2%)
 - 保護者 3校 (11.2%)
 - OB、OG 2校 (7.4%)
- ・ 指導しているのは顧問のみ 10校 (37.0%)

6割を超える学校で、外部の指導者を依頼している。そのうちの8校では謝礼を支払っている。また、競技経験はないものの、JBCに所属し、審判員の資格を取得している顧問も見られた。公立高校の場合顧問が異動して指導するものがいなくなる場合も考えられる。

指導者の育成を考えた時に、高校で競技をしていた選手が、大学を出て教員として指導者になることは稀である。したがって、部活動の顧問になった先生に興味を持ってもらい、指導ができるようになってもらう必要があるが、なかなか厳しい状況にある。技術の指導に関しては、県連の指導員やボウリング場のスタッフに依頼し、協力しながら競技力を向上させていきたい。

3 部活動としてのボウリングの普及と全国高体連に向けて

(1) 生徒のアンケート結果より

①		ボウリングを始めたのは		ボウリングを始めたきっかけは						
性別	人数	高校入学前	高校入学後	両親、祖父母がやっていた	兄弟姉妹がやっていた	友達がやっていた	ボウリング場で誘われた	ジュニア教室	テレビ等で興味を持った	高校に部活動があった
女子	69	13	56	14	7	9	4	2	2	33
男子	322	49	273	47	11	56	16	6	16	204
合計	391	62	329	61	18	65	20	8	18	237

391人中329人(85%)が高校からボウリングを始めているが、そのほとんどが高校に部があったから、友達に誘われたからとなっている。逆に高校入学前にはじめていた選手は両親や兄弟姉妹など家族の影響を受けている。

②		ボウリング部があってよかったことは				
性別	人数	仲間ができた	学校の代表として大会参加	大会に顧問の引率がある	大会経費が学校から出る	全国に友達ができた
女子	69	56	30	10	17	8
男子	322	235	108	27	50	24
合計	391	291	138	37	67	32

291人(75%)と一緒に頑張る仲間ができたことをあげている。また、学校の代表として大会に出ることに誇りを持っている生徒が多い。引率や全国大会に参加する時の経費に関しては、高体連未加入の都道府県では引率の保護者の分も含め全額個人負担になっているが、高体連加盟の学校の選手にとっては当たり前のことだと思っているのか、メリットとしてあげる生徒が思ったより少なかった。

③		高校卒業後はどのようにボウリングに取り組みますか						
性別	人数	プロを目指したい	競技として続けたい			趣味として続ける	高校卒業後やめる	未定
			大学で	実業団で	個人で			
女子	69	5	5	0	8	24	4	21
男子	322	13	12	9	19	160	19	107
合計	391	18	17	9	27	184	23	128

プロを目指すものもいるが、競技として続けていきたいと考えている生徒が少ないのが残念である。

④		技術向上のための工夫			
性別	人数	ボウリング月刊誌を読む	TV番組を見る	You Tube等を見る	大会を見学に行く
女子	69	4	15	40	5
男子	322	32	46	205	12
合計	391	36	61	245	17

スマートフォン等で安易に動画が見られるようになり、参考にしている生徒が245人(63%)いた。また、練習中も自分のフォームを撮影しチェックする選手も増えてきている。専門的に指導できる人が少ないのも理由の一つと考えられる。

(2) 学校用アンケートの結果より

ボウリング競技に部活動として取り組んで

良かったこと	苦勞していること
<ul style="list-style-type: none"> ・技術面だけでなく、人間力が身についてきた。社会性の構築、挨拶、ボランティア活動など ・全国大会で結果を残してくれた。 ・大会を通じ感動、達成感を共有できた。 ・高校から始める生徒が多いので、初めてでも気楽に始められる。 ・レジャーからスポーツへ変化していく中で礼儀などが身につく ・大会を通じ、他県、他校との交流が可能となり、向上意欲を持たせることができた。 ・新しい事に挑戦しようと意欲的に参加してくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公共施設を利用しているため思うように練習できない。(特に土日) ・卒業後も継続できる環境が整っていない。 ・女子部員が少ない。 ・技術面の指導(指導者の不足) ・最初にボール、シューズなどの費用がかさむため、1年生の勧誘が難しい。 ・練習のゲーム代が負担できず、練習に参加できない生徒がいる。 ・センター主催の大会など、学校が把握できない大会がある。

<ul style="list-style-type: none"> ・ボウリング場で年配の方とのコミュニケーションをとることが上手になった。 ・上位大会へ出られるチャンスが多く、達成感が得やすい。 ・個人で取り組むことができ、選手が多数いなくても活動できる。努力次第で結果が残せる。 ・思い通りにならなくても我慢や辛抱することを身につけることができる。 ・不登校の生徒が部活動と通して学校に来るようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動場所が学校外であるため、顧問の目が行き届かない時がある。 ・保護者の理解を得るのが大変である。 (特に経費面とレジヤードと思われること) ・経験者と初心者の温度差がある。 ・用具の調達に苦勞する。 ・ボウリング場までの移動が大変である。
--	---

ボウリング競技の特性として、自分のペースで練習できるため、初心者でも楽しく活動できるようである。コミュニケーションが苦手な生徒や、中学時代に部活動で活躍できなかった生徒も努力次第で結果が残せているようだ。また、部活動として取り組むことによって礼儀や社会性が身についている。

苦勞している点は、施設、指導者、費用、保護者の理解をあげる学校が多かった。

(3) 部活動として活動し、全国高体連に加盟するために

ボウリングは誰にでもできるスポーツであり、競技のレベルに関わらず楽しめる競技である。そのため、高校から始めた初心者でも、意欲的に取り組むことができる。それに加え個人のペースで練習できるため、運動が苦手な生徒でも時間をかけて練習すれば、上位の大会を目指せるレベルになることもある。一方で、選手のレベルの向上も著しく、全国大会では男子はアベレージで 230 点、女子でも 210 点を超えないと優勝できない。技術面では両手投げやサムレス投法など、一昔前には邪道とされていた投法も今では普及し、多くの高校生がとりいれている。このような選手の指導に対しては、競技経験者の顧問でも指導が難しく、加えてボールの特性やレーンコンディションを把握して指導することはとても困難である。したがって、指導者の育成はまずボウリングのルールや基本を覚えてもらい、技術面に関してはボウリング連盟やボウリング場のスタッフの協力が必要不可欠である。それに加え、練習場所の確保、練習費用の問題と向き合いながら、部活動としてのボウリングを普及させていきたい。

高体連に加盟していない都道府県では、国体の代表を選ぶことも苦勞するようなどころもある。逆に、優秀な選手が数多くいるにもかかわらず、面倒を見る先生がいないことから高体連に加盟できないところも多い。大会の参加も保護者の負担が大きく、他のスポーツに取り組む高校生との差が大きい。アンケートの結果を見てもわかるように、学校に部があればスポーツとして始める選手が数多く出てくるであろう。ボウリングにスポーツとして、部活動として取り組むすべての高校生たちが、他の競技の選手と同じように学校の代表として出場できるためにも、まずは全国高体連加盟を目指して活動していきたい。JBC には今年度より高体連加盟推進委員会が設立されたほか、12月に行われている文部科学大臣杯争奪全国高等学校対抗ボウリング選手権大会では今年度初めて全国高体連の後援をいただくことになった。現在1府7県となった全国高等学校ボウリング専門部加盟連合会のメンバーや、JBC と協力しながら普及活動を続けていき、1日も早い全国高体連加盟を目指したい。

1. はじめに

(1) ボート競技の種目

ボート競技の種目は1人が2本のオールを操作するスカル種目と1人が1本のオールを操作するスウィープ種目に分けられる。それぞれ1人乗りや2人乗り、8人乗りがあり、スカル種目には1人乗りのシングルスカル、2人乗りのダブルスカル、4人乗りのクォドルプルがあり、高校生の4人乗りでは舵を操作する舵手が乗り、舵手付きクォドルプルで競技が行われている。

(2) これまでの成績

これまでのボート競技における石川県の高校生の全国大会等での成績は、全国総体や全国選抜大会にて優勝や入賞を果たしている。また、世界ジュニア大会やアジアジュニア大会の日本代表に選考される選手も数名輩出している。過去5年で見ても、全国高校総体2位や、国民体育大会優勝、世界ジュニア日本代表輩出など一定の成果を出すことができています。しかし、これらの成績はシングルスカルもしくはダブルスカルでのものであり、最もスピードの出る舵手付きクォドルプルでは入賞を果たせていないのが現状である。

今後はボート専門部の悲願である舵手付きクォドルプルでの入賞を目指し、ボート専門部が一丸となって強化をしていきたいと考えています。そのためにも、今回の調査研究を通し、これまでの検討してこなかった健康と安全という観点からボート競技を考え直し、悲願達成に向けた取り組みを考えていきたい。

近年過去5年間の成績

平成25年度	全国選抜大会	男子ダブルスカル	4位
平成26年度	全国高校総体	男子ダブルスカル	2位
	全国選抜大会	女子ダブルスカル	2位
平成27年度	国民体育大会	少年女子シングルスカル	1位
平成28年度	全国高校総体	男子シングルスカル	6位
	国民体育大会	少年男子シングルスカル	3位
平成29年度	国民体育大会	少年女子ダブルスカル	8位

2. ボート競技と健康

(1) ボート競技で考えられる健康影響

ボート競技は全身運動であり、適切な練習や動作を行っていれば、健康への悪影響は少なく、生涯スポーツとして楽しめるスポーツである。

しかし、座った状態で全力を発揮するため、過度な練習や動作において局所に負荷がかかりすぎると、腰や膝、肋骨に負担がかかり故障につながる可能性はある。考えられる故障としては、腰痛や椎間板ヘルニア、肋骨の疲労骨折が挙げられ、腰痛や疲労骨折は漕ぎに関係なく、ボート競技を行う上で起こりうる可能性が多くある。

また、ボート競技の動作は消費エネルギーが大きく、適切な栄養摂取を行っていかなければ疲労が回復されず故障につながることも考えられる。エネルギー摂取の目安としては男子選手で4000～5000kcal、女子選手で3000～3500kcalとされている。この目安は大学生以上の選手の目安であり、

高校生では多いと考えられる。しかし、ボート競技におけるエネルギー消費は多いことは確かであり、一般的な目安以上の摂取を行わないといけない。

(2) 現状

石川県ボート専門部に加盟している4校（小松高校、七尾高校、津幡高校、小松明峰高校）において故障している選手の有無、状態を調査したところ、数名で故障がみられた。故障している箇所は腰が多く、ボート競技特有である座って力を発揮するという動作において腰への負担が大きく関係していると考えられる。特に競技歴が1年未満の選手に多い傾向にみられた。また、腰痛が影響し選手の継続が難しくなった選手や競技を辞めてしまう事例もあり故障に対する対策を行っていかねばならないと考えられる。

栄養の状態に関しては、合宿や県外大会での食事を観察していると明らかに栄養が不足している傾向がみられていた。そのため、県外の選手と比較すると体格が小さく、力で負けることが多くあった。数年前より日本ボート協会が作成した「ジュニアクルーのためのコンディショニング BOOK」を活用し改善を試みていたが成果は上げられていない現状があった。そこで昨年より国体の強化指定選手に対してスポーツ管理栄養士の指導を取り入れ、今年度も行った。

(3) 対策

故障の対策としては体力、筋力の段階に応じた練習を行っていくことが求められる。石川県におけるボート競技の開始時期は高校生からが圧倒的に多い。非日常的な動作を行うボート競技において競技歴に応じた指導を行っていくことが故障の減少につながると考えられる。また、ボート競技において故障の予防のための練習も取り入れていく必要があると考えられる。ボートに乗って練習をするだけでなく、陸上での練習においてボート競技の動作につながる練習を今後ボート専門部として考えいかなければならない。

栄養の対策としては、日本ボート協会作成の資料を活用し、積極的に栄養指導を行っていく必要がある。しかし、専門的な知識も求められることから、資料を活用していただくだけでは効果は表れにくいと考えられる。そこで今年度のような専門家の指導を取り入れ、その情報を共有していくことが求められる。

昨年度は男子選手1名が指導を受け、選手本人の意識に変化があったが、指導者がどのような指導を受けているかの把握が不十分であったこともあり、情報の共有ができていなかった。そこで本年度は指導者も指導の場に参加をした。今年度は男子選手1名、女子選手2名が専門家による指導を受けることができた。成果としては、特に女子選手の意識の変化が大きかったように思われる。指導前は「食べると太る」という意識が強くなかなか食事での栄養摂取ができず菓子類での摂取が多い状態であったが、専門家による指導を受けたことによって「食べても太らない、むしろ食べないと太る」というような変化がみられ、栄養摂取に関しての認識の変化がみられ、競技力の向上もみられた。

今年度の取り組みを継続することはもちろんのこと、強化指定選手以外の選手にも還元できるように取り組んでいかなければならない。

3. ボート競技と安全

(1) ボート競技で考えられる事故

ボート競技の進行方向は選手の背中に向かって進んでいくスポーツである。そのため、進行方向の前方を確認するためには定期的に後ろを向いて漕がなければ安全の確認がしづらく艇と艇の衝突が考えられる。また、艇の進行方向を考えて漕がなければ岸に衝突することや、反対側の航路に侵入し逆方向から進行してくる艇と衝突する可能性もある。

また、自然の中で行うスポーツであり、天候や風、気温、水温、水の流れ、波等にも注意をしていかなければ、落水する可能性や落水時の生命の危険も考えられる。

幸いこれまで大きな事故はなく、ボート競技は行われている。

(2) 練習環境

石川県の高校が練習を行っている場所は3ヵ所である。大会は津幡町に作られている石川県津幡漕艇競技場で行われている。津幡漕艇競技場は津幡高校が日頃から練習をしており、津幡南中学校も使用している。この漕艇場はモーターボートも完備されており安全対策としては落水しても救助に時間がかかることなく行えるようになっている。また、練習時では、競技艇と並行してモーターボートを走行させることができ、安全監視が十分に行える環境にある。

小松高校や小松明峰高校は小松市にある梯川で日頃練習を行っている。この、練習場は、小松市立丸内中学校も練習しており、多くの艇が川に出ている環境である。救助艇は配備されているが、川幅が狭く、津幡漕艇競技場のように常にモーターボートが並走することは難しく、練習時は指導者が堤防から安全を監視している状況である。そのため、各学校で連携し安全対策を行っている。

七尾高校は、能登半島に面する七尾湾で練習を行っている。この練習場は七尾高校のみが使用している環境であり、他校との衝突等は考えられない。しかし、海に面しており、津幡や小松の練習環境とは異なる安全対策が求められる。

(3) 対策

津幡漕艇競技場のようにモーターボートが配備されていても落水や衝突は考えられる。そのため、日頃からの安全対しての意識を高めることや定期的に安全講習会等を行い対策していかなければならない。また、競技艇は細く、長いのが特徴で不安定でもあり、落水は漕暦に関係なく誰にでも起こる可能性がある。そのため、対策として、落水をしても自力で復帰することができるように、復帰する手順の講習や自力復帰の練習を温かい時期に行い経験を積むこともしていかなければならないと考えられる。

4. まとめ

健康と安全という観点から今回調査研究を行ったが、両観点ともに各学校での対策となっていることが多い現状であることがわかった。しかし、各学校のみでの対策には限界もあり、故障の予防や減少、安全な環境の確保のためにも、今後は情報の共有や講習会の開催など連携をこれまで以上に行っていかなければならない。

その成果として健康と安全だけでなく、競技力の向上や普及、石川県ボート専門部の発展に結びついていくことが最も望ましい。

競技力向上に向けた取り組み～石川県バスケットボールフェスティバルに参加して～

バスケットボール部専門部

石川県立金沢西高等学校 東 勝彦

1. はじめに

日本国内でのバスケットボールの競技人口（競技者登録数）は2016年で約63万人（日本バスケットボール協会発表）とされており、他のスポーツに比べ競技人口が多い競技である。高校生の部活動としても、競技人口（全国高等学校体育連盟・加盟人数）は2016年で男子95,681人、女子61,175人とされており、全競技で男子は2位、女子は1位である。

また、2016年よりB.LEAGUEが開幕し、バスケットボールのプロ化・メジャー化がより一層進んでいる。そのため、底辺拡大はもちろんのこと、競技力向上が大きく求められている現在である。

平成28年度 全国高等学校体育連盟 加盟・登録状況

	競技	人数（男子）	競技	人数（女子）
1位	サッカー	169,855	バスケットボール	61,175
2位	バスケットボール	95,681	バレーボール	60,941
3位	陸上競技	70,276	バドミントン	56,369
4位	テニス	68,752	陸上競技	39,613
5位	バドミントン	57,830	テニス	38,588

2. 本県の実績

本県は、各カテゴリーにおいて以下のような輝かしい成果を収めている。

(1) ミニバスケットボール（小学生）

2016年度 第47回全国ミニバスケットボール大会 男子 優勝 女子 優勝

(2) 中学生

2015年度 第45回全国中学校バスケットボール大会 女子 準優勝

2014年度 第44回全国中学校バスケットボール大会 男子 優勝

2013年度 第30回都道府県対抗ジュニアバスケットボール大会 男子 準優勝

(3) 高校生

2016年度 第71回国民体育大会 バスケットボール競技 少年男子 準優勝

2016年度 第47回全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会 男子 3位

(4) 社会人

2017年度 第47回女子全日本教員バスケットボール選手権大会 女子 3位

2016年度 第46回女子全日本教員バスケットボール選手権大会 女子 3位

2016年度 第42回全日本クラブバスケットボール選手権大会 男子 優勝

3. 石川県バスケットボールフェスティバル

石川県バスケットボール協会が行っている競技力向上の取り組みとして石川県バスケットボールフェスティバルが挙げられる。小学校6年生・中学校1年生、中学校2年生・高校1年生を対象として、各カテゴリーの連携の中で、選手の育成を図り、バスケットボール技術の正しい理解と競技に臨む真摯な態度を育むことを目的としている。今年で5回目となる取り組みであるが、この取り組みが石川県の競技力向上の一つになって

いる。

(1) 具体的な取り組み

①ミニバスケットボール（小学生）

ア 対象

U10（小学校4年生）の選抜、U11（小学校5年生）の選抜、U12（小学校6年生）の地区選抜

イ 内容

それぞれのカテゴリーにおいてリーグ戦を行う。

②中学生

ア 対象

U13（中学校1年生）の地区選抜とU12（小学校6年生）の選抜、U13（中学校1年生）の選抜とU14（中学校2年生）の選抜

イ 内容

それぞれのカテゴリーにおいてリーグ戦を行う。U13とU12の試合では、中学生と小学生の試合となり、中学校・小学校の連携が期待されている。



③高校生

ア 対象

U16（高校1年生）の選抜とU14（中学校2年生）の選抜（ジュニアオールスター）

イ 内容

U16の選抜3チームとU14の選抜1チームの4チームでリーグ戦を行う。高校生と中学生の試合となり、高校・中学校の連携が期待されている。

④社会人

ア 対象

U18の選抜候補と大学選抜と社会人の代表チーム

イ 内容

U18の選抜候補2チームと大学選抜1チームと社会人代表チーム1チームの4チームで試合を行う。高校生と大学生、社会人との連携が期待されている。



(2) 石川県バスケットボールフェスティバルに参加して

①選抜チームとしての意識

各カテゴリーで、選抜された選手が集まり練習をし、試合を行うことで選手自身の意欲の向上につながっていた。また、地区の代表・県の代表になることでより高いレベルのバスケットを経験し、選手の競技力向上に大きくつながっていた。フェスティバルが終わった後も、この経験を自チームに還元したり、次のカテゴリーで代表に入ることを目標としたりして、バスケットボールに取り組む意識が向上した。

②各カテゴリーの連携

U13とU12の試合、U16とU14の試合、U18と大学生、社会人との試合のように小・中・高校・大学・社会人の連携がなされている。カテゴリーを越え試合を行うことが、競技力の向上や今後もバスケットボールを続け上手になりたいという意識の向上につながっている。特に、U14やU18は県の代表チームであり、その後控えているジュニアオールスターの大会や少年国体の大会に向けての強化に大きくつながっている。

③指導者の育成

U16のカテゴリーでは、3チームとU14の4チームでリーグ戦を行う。それぞれのチームにHC、ACがつきチームのコンセプトを基に選手選考を行う。私は、3年間石川県バスケットボールフェスティバルに参加し、1年目はU16チームのACとして、2・3年目はU16チームのHCとして参加した。大会までに2回の練習会を実施し、その中でチームの方針を示し、チームを作らなければならない。選抜された選手の長所を生かしたバスケットを組み立てることと同時に、コーチ陣の考えるコンセプトにいかにか選手を近づけることができるかどうか。選抜チームの指揮を執る難しさを痛感した。

しかし、他の指導者の方々と一緒にチーム作りを行う中で、バスケットの様々な考え方を知ることができ、視野を広げることができた。選手の育成だけでなく、指導者も育成することができる取り組みだと感じた。

④石川県の活性化

石川県バスケットボールフェスティバルは近年、全てのカテゴリーの試合が同一会場で行われている。そのため、他のカテゴリーの試合を間近で感じることができる。上のカテゴリーに上がるときに、石川県でバスケットボールを続けたいという意識が芽生えていると感じた。過去に中学校の時に実績を上げた選手が県外流出してしまうことがあったが、近年では、あまり見られなくなった。

4. ベスト16シードの導入

高体連バスケットボール専門部の取り組みとして、16シードを導入している。選手、若手指導者にとって目指しやすい目標を新しく作り出し、石川県の活性化を図っている。また、1月に七尾大会が行われるが、この大会は北信越大会への出場権がかかった大会である。七尾大会に出場できるチームは、11月に行われる新人大会のベスト16である。より力のあるチーム同士で北信越大会の出場権を争うことで県全体のレベルアップを図っている。

私が所属する高校は、現在シードがない状況である。新人大会や総体では2回勝ち上がるとベスト16シードを得ることができる。スモールステップとしてベスト16を目指し、その次のステップとしてベスト8があるため、選手、指導者のモチベーションの向上につながっている。

県大会の流れ

- 4月 張江杯 ……シードチームと地区の予選を勝ち上がったチーム
- 5月 高校総体 ……優勝チームは、全国総体に出場、上位3チームは北信越大会に出場
- 9月 選抜大会 ……優勝チームは、全国選抜大会に出場
- 11月 新人大会 ……ベスト16は七尾大会に出場
- 1月 七尾大会 ……上位3チームは北信越大会に出場

5. まとめ

高体連バスケットボール専門部では、石川県バスケットボールフェスティバルに参加したり、ベスト16シードを導入したりして、競技力向上を図っている。その中で選手の育成はもちろん指導者の育成もなされ、石川県の活性化につながっている。チームに関わらず選手・指導者が互いに協力し、競い合うことで競技力向上に大きくつながる。バスケットボールがメジャー化する現在、日本が世界で勝つことが求められている。石川県から世界で活躍できる選手・指導者ができるよう、今後も競技力向上に努めていきたい。

第11回県研究大会参加者名簿

	役 職	氏 名	所 属
1	石川県高等学校体育連盟会長	下根 浩明	金沢桜丘高等学校長
2	石川県高等学校体育連盟副会長	上杉 正人	寺井高等学校長
3	石川県高等学校体育連盟副会長(調査研究部長)	徳田 伸一	金沢伏見高等学校長
4	石川県高等学校体育連盟副会長	高柳 直樹	穴水高等学校長
5	石川県教育委員会保健体育課長(高体連参与)	近 岡 守	
6	石川県高等学校体育連盟理事長	釜田 涉	金沢桜丘高等学校
7	石川県教育委員会保健体育課指導主事(指導助言者)	木村 哲也	

	学 校 名	参加者氏名(下線:発表者、ゴシック:調査研究委員)			
1	大聖寺実	西田 京美			
2	加賀聖城	木村 美強			
3	大聖寺	矢田 英	達 光 洋	油谷 憲治	
4	加賀	林 文夫			
5	小松商業	田村 智成	山作 直弘		
6	小松工業	中谷 昌和	菊田 克己		
7	小松市立	浅田 崇一	山本 伸忠		
8	小松北	塩屋 千学	安田 誠二		
9	小松	豊田 浩博			
10	小松明峰	川端 孝博	(発表者)高澤 隆介		
11	寺井	久保 祐子	奥村 誠		
12	鶴来	山田 純丈	櫻井 外郷		
13	松任	大日向 茂樹	嶋田 祐介		
14	翠星	増田 誠也	澤入 佳代		
15	野々市明倫	大倉 香奈子	山田 進		
16	金沢錦丘	油野 知加	角橋 茂則		
17	金沢泉丘	宮西 良岳	青木 崇		
18	金沢二水	中村 建哉	荒川 富夫		
19	金沢中央	北中 弘規	門間 昭彦		
20	金沢伏見	(発表者)今川 徹	榊原 昭善		
21	金沢辰巳丘	竹内 惠梨子	田村 達弘		
22	金沢商業	長山 健一	中町 和弘	北村 由美	
23	県立工業	石川 貴之		山田 齊	
24	金沢桜丘	横野 祐太	小田 哲生	寺西 了	
25	金沢市工業	水内 浩			
26	金沢西陵	中村 兼希	(発表者)東 勝彦		
27	金沢北陽	松本 祐尚	後川 徳人		
28	金沢向陽	山首 一恵	中川 義之		
29	内灘	神田 康博	片岡 信忠		
30	津幡	勝二 国博	中村 篤		
31	宝達	至極 英代			
32	羽咋	水野 清正	中越 早代		
33	羽咋松	藏野 紀夫			
34	羽咋工業	折戸 貴之			
35	志賀	折官 本裕			
36	鹿西	今藤 謙二			
37	七尾東雲	倉脇 寛支	深田 茂		
38	七尾尾	中西 幸一			
39	七尾城北	白藤 金一			
40	田鶴浜	山岸 亜矢			
41	穴水	藤原 知弘			
42	門前	新出 廣			
43	輪島	赤穂 真			
44	能登	嶽 桂 輔			
45	飯田	岡田 英典			
46	ろう学	木下 郁子			
47	明和特支	小林 真人			
48	いしかわ特支	高瀬 直人			
49	七尾特支	永山 沙緒			
50	金大附属	丹内 周子			
51	小松大学	桂 孝 則	人見 雅樹		
52	北陸学院	石井 崇之	宮田 佳恵		
53	遊学館	中田 浩文			
54	金沢	日吉 正孝			
55	尾山台	星野 仁孝			
56	星稜	安達 裕子	櫻井 亮士	米田 光利	
57	金沢学院	中島 義春			
58	鵬学園	藤井 繁文			
59	航空石川	田辺 和文	南 健介		
				参加者合計	101